

巻頭言

人間主義の追求

創価大学平和問題研究所 所長 玉井秀樹

2016年、創価大学平和問題研究所は設立40周年を迎えた。創価大学は、建学の精神に「人類の平和を守るフォートレス（要塞）たれ」と掲げた通り、開学当初より平和創造の拠点たることを期していたが、平和学に関する具体的な取り組みは、1976年の平和問題研究所の設立に始まると言えるであろう。

研究所の最初の具体的な成果は開設から3年を経て1979年に創刊した研究紀要『創大平和研究』として結実する。この創刊号には創立者・池田大作先生から「21世紀への平和路線」を特別に寄稿していただいたが、この論稿に展開された、いわば「人間主義的平和観」とでもいうべき思考、そして、この立場からする政策研究という当研究所の活動方針が確定したとあってよいであろう。

平和問題研究所設立から「21世紀への平和路線」発表に至る1970年代の国際社会もまた大きな変動の10年間であった。70年代当初は、いわゆる米ソ緊張緩和（デタント）がすすみ、戦略兵器制限交渉が進展、1972年にはSALT Iが調印される。しかし、それは平和の到来を意味していたわけではなく、米ソの核爆弾製造数は急速に増加し、アジア・アフリカでの地域紛争なども断続的に勃発。また、1973年の第4次中東戦争を契機にアラブ産油国は石油戦略を発動し、いわゆる「石油危機」によって世界経済は大きなダメージを受けることになった。

当時の平和研究者は、「デタント」といわれながら核軍拡が進み、また、第三世界における貧困が深刻化し、地域紛争が頻発するという、「平和ではない」

状況が拡大する原因の究明に取り組み、国際社会の構造そのものに、平和を妨げる「暴力」を生み出す問題が生じているのだという批判的研究が発展した。この時期、1973年に日本平和学会が発足し、1975年に日本の大学初の平和研究所として広島大学平和科学研究センターが設立された。創価大学平和問題研究所は、このように日本における平和研究の制度化が進むなかで誕生したものである。

ところで、1977年になると米ソ関係は再び悪化の兆しを見せ始める。急速に進んだ核軍拡の結果、ソ連が新型の中距離核ミサイルを配備し、一方で米国は命中精度を上げた核ミサイル技術をもとにソ連の軍事目標を破壊する核配備をするという方針を打ち出す。そして、1979年はエポックメイキングとなった。中越紛争という社会主義世界の対立、イラン革命政権樹立という反米イスラム勢力の登場、そして、ソ連のアフガニスタン侵攻によって米ソ関係の悪化が決定的になった。SALT IIは批准されないままに終わり、いわゆる、「新・冷戦」が始まった。

『創大平和研究』創刊号、そして、「21世紀への平和路線」はこうした時代背景で生まれたものであった。

「21世紀への平和路線」ではその冒頭で、戦争がもたらす破壊と殺戮が、これまでの戦争正当化の理由を全く無意味にするほどに甚大な規模になっており、戦争を廃絶し、平和を追求しなければならないと主張する。そして、このような戦争の変質は、「人間が兵器を使うというよりも兵器に人間が使われる傾向が増大し、人間そのものが、兵器や戦争の全き支配下に置かれるようになってきた」ために生じたもので、このような人間支配をする戦争文明の行きつく先が核戦争の脅威であることを指摘し、核の脅威をこう説明する。

核戦争の脅威というものは、ヨーロッパ主導型の近代文明総体が直面している、一つのカタストロフィー（破局）であることが分かる。それは、近代史を通じて徐々に進行してきた、機械や政治機構による人間支配の完結ともいえる。したがって21世紀への平和路線を模索するには、そうした史的視野に立って、文明総体を問い直すという、広はんな分析、パースペク

ティブ（展望）が要請される。機械や巨大機構による人間支配から人間を救い出し、どう主役の座を回復せしむるかという、明確な目標を浮かび上がらせるために――

池田先生は、1978年の国連軍縮特別総会への軍縮提言を期に1983年からは毎年平和提言を発表されているが、これまで一貫して「国際社会に人間性を復権させることこそが、人類的課題解決への鍵となること」をさまざまな観点から提示されてきた。池田先生が言われる「人間性」、「ヒューマニティー」、「人間主義」とは、エゴイスティックな人間中心主義ではない。利他と創造性にあふれる働きをさして本来の「人間らしさ」といわれている。核戦争の脅威を高め、人々を殺戮してかえりみない残虐な人間の存在を冷徹に見据えたうえで、そのような人間を見放すのではなく、利他と創造の善なる存在へ変革するという道を提示されてきた。

この志向性は、「人間の生にとってかけがいのない中枢部分を守り、すべての人の自由と可能性を実現する」という人間の安全保障概念と深く共鳴するものであり、当研究所としても微力ながらこの課題に取り組んできたところである。

このほど発刊の運びとなった『創大平和研究』では、こうした当研究所の地道な取り組みのひとつの成果として開催したシンポジウムの内容を発表させていただくことができた。たいへんに有意義な知見を与えてくださった各シンポジウムのパネリストの先生方にあらためて御礼申し上げます。そして、このシンポジウムを可能にした、朴総長をはじめ韓国・慶南大学の諸先生、人間の安全保障学会の先生方、戸田記念国際平和研究所の皆様にも心より感謝申し上げます次第である。

慶南大学との研究協力は、朴総長の積極的な提案もあり、今後、台湾の中国文化大学を加えた3大学の共同事業として取り組む発展を見せた。2017年9月には、本学がホストとなって沖縄の地で国際会議を開催する予定となっている。誰もかけがえのない存在であるという人間主義の立場から、対立と分断を協和と連帯へ転換する創造に挑戦していきたい。